



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	沖縄県小学生用メンタルヘルス尺度の作成 (2) : 継続的データを用いて
Author(s)	小橋川, 久光; 小林, 稔; 高倉, 実; 宮城, 政也; 砂川, 武彦
Citation	琉球大学教育学部紀要(66): 33-40
Issue Date	2005-02
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1517
Rights	

沖縄県小学生用メンタルヘルス尺度の作成 (2)

— 継断的データを用いて —

小橋川久光、小林稔、高倉実、宮城政也、砂川武彦

Examining of Mental Health Scale for Schoolchildren in Okinawa Prefecture (2)

KOBASHIGAWA Hisamitsu*・KOBAYASHI Minoru*・TAKAKURA Minoru**
MIYAGI Masaya***・SUNAGAWA Takehiko*

キーワード：学校生活関連尺度、日常生活関連尺度、

はじめに

研究1の概要は以下の通りであった(小橋川、小林、高倉、宮城、砂川 2002)。

近年、大人の生活はもとより子ども達の生活においても深刻な問題が生じてきていると言われる(高橋、2000)。特に子ども達においては、急激な社会生活環境の変化やライフスタイルの変化、生活体験の不足や人間関係の希薄化、心理的ストレスの増大などが、現代社会における児童・生徒に関わる身体的、心理的諸問題の原因と考えられ、そのことが子ども達のメンタルヘル스에様々な影響を与えているといわれる(山崎 2000、渡辺 2000、大森 2000)。このようなことを背景として、メンタルヘルスを見るための尺度が幾つか作成された。例えば、園田ら(2001)は、岡安・島田・牧野(1992)、堀野・森(1991)などのストレス反応や抑鬱尺度を参考にし、メンタルヘルス尺度を作成している。作成された尺度は、「身体症状」、「抑うつ」、「衝動」、「対人不安」、および「非効力」の5因子から構成され、得られた5因子は相互に有意な相関関係を示し、特に学校生活における「引きこもり」とも有意な関係があり、メンタルヘルスに関わる有効な尺度であることを証明している。しかし、本尺度の標準抽出が、一貫教

育を行っている偏りのある特定の集団を対象としていたことに問題が残されていた。

一方小橋川ら(2001)宮城ら(2001)は、沖縄県の児童・生徒のメンタルヘルスパターンが、九州地区の児童・生徒と異なっていることから、新たに沖縄県児童・生徒を対象としたメンタルヘルス尺度の必要性を指摘し、新たな尺度作成を試みている(小橋川ら2002)。本尺度は園田ら(2001)の尺度を用いて、沖縄県公立小学校15校の男子585名、女子519名、合計1104名の児童・生徒を対象に調査し尺度構成がなされた。因子分析および因子相互の相関係数を求めたところ、最終的に構成されたメンタルヘルス尺度は、身体症状、対人不安、衝動、抑鬱、非効力感の5因子23項目からなり、結果として、園田らの研究と同様な因子構造と因子相互の相関係数を示していた。

本尺度が日常生活における一般的なメンタルヘルス尺度であることから、小橋川らは日常生活関連要因を説明変数として重回帰分析によりβ係数を算出し、要因の絞込みを行っている。その結果、係数そのものは低い値を示したが、健康要因、友人(仲間)要因、睡眠関連要因が抽出されている。メンタルヘルスに関わる日常生活関連要因と関係は低くても、日常生活でのその要因が、長期にわたったときの影響は無視することはできるもので

*College of education, University of the Ryukyus

**College of Medicine, University of the Ryukyus

***Okinawa Prefectural College of Nursing

はない。

そのほか、性差の比較の結果、抑鬱、対人不安、非効力感およびメンタルヘルス得点において女子の方が有意に高い得点を示していた。

以上が研究(1)の概要であるが、今後の課題として次のことが上げられていた。

- (1) 縦断的資料を用いて本尺度の安定性の検討および有効性の検討を行うこと。
- (2) メンタルヘルス尺度を用いて、精神的健康度に問題があると思われる児童生徒の抽出方法について、具体的にはメンタルヘルス得点の何点からカットオフにするか、の決定。
- (3) 学年の進行とあわせて縦断的研究を行い小学生高学年の尺度を作成すること。

従って、上記に上げた課題が本研究の目的となる。

人は生活環境の中で、生活特有の反応を示すものとする。特に児童・生徒にとって学校生活は重要な生活環境となっている。幼児教育から始まり大学教育までかなりの時間を学校教育と関わっている。

園田らは、小・中学生用メンタルヘルス尺度を作成するに当たって、その有効性を見るために、「試験不安」、「引きこもり」、「反発」などの学校生活関連要因を取り上げて検討を行っている。その結果は、いずれも作成されたメンタルヘルス尺度と有意な関係があることが示されていた。そこで本研究の課題1を解決するために、園田が用いた学校生活関連要因を用いてその有効性を検証する。

小学校高学年は、身体発達において、第2次成長期の真只中にあり、特に女子においてはその傾向が強い時期にあるものとする。そのような時期にある小学校5年生、6年生のメンタルヘルス得点の変化を、経年的に縦断的資料を用いて分析する。(身体的、体力的、メンタルヘルスの変化について)。

基準の設定に当たっては、他のメンタルヘルス尺度を用いて関連要因妥当性を検証したりあるいは、面接法を併用しながらカットオフの基準を設定する方法も考えられるが、今回は、次のような統計学的な基準を設定し、カットオフ得点を設けることとした。

教育学、社会学、心理学、体育学の領域におけ

る統計学的見地からの棄却領域は、95%を基準としているのが一般的である。そして、両側検定の場合は両サイドに2.5%を、片側検定の場合はどちらか一方に5%の有意水準を用いて判定がなされる。本研究においては、メンタルヘルス得点の高い方の一方側を設定すればよいので、片側の5%をカットオフラインとして設定することとした。即ち、総得点の上位5%に相当する得点を任意に設定しカットオフ得点とする。

最後に本研究のまとめとして、研究1、研究2をもとにして、沖縄県小学校高学年生用メンタルヘルス質問用紙を作成する。

方 法

調査1 (小学校5年生)

1. 被験者：沖縄県公立小学校15校の児童・生徒を対象に、集合調査を行った。男子585名、女子519名、合計1104名であった。
2. 調査期間：2001年5月～7月中旬に行った。
3. 調査方法：事前に学校長の了解を得てから、学級担任によるクラス別集合調査を行った。
4. 調査内容

- 1) メンタルヘルス尺度：お茶の水女子大学の園田ら(2001)が作成したメンタルヘルス尺度を参考に、①身体症状・・・6項目、②体重・・・3項目、③抑うつ・・・5項目、④衝動・・・5項目、⑤対人不安・・・5項目、⑥非効力・・・4項目、合計28項目を用いた。評定は、「とてもよくあてはまる・・・5点、」から「全くあてはまらない・・・1点」までの5段階評定尺度である。

因子分析の結果、園田ら(2001)と同様に、身体症状、抑うつ、衝動、対人不安、非効力感の5因子から構成された(小橋川ら2002)。

- 2) 学校生活尺度：本尺度も園田ら(2001)が用いている尺度である。本研究ではネガティブな面を測定する「反発」、「引きこもり」、「テスト不安」の3因子を用いた。
- 3) 体格および体力測定：体格は「身長」、「体重」、「座高」の3種目を、体力測定は新体力テスト実施法により実施した。

調査Ⅱ (小学校6年生)

1. 被験者：2001年度の5年生から無作為に抽出した。従って縦断的標本である。男子236名、女子218名、合計454名である。
2. 調査期間：2002年5月初旬～7月中旬に行った。
3. 調査方法：前回と同様に、集合調査をおこなった。
4. 調査内容：①メンタルヘルス尺度、②学校生活尺度、③体格および体力測定を前回と同様な方法で行った。
5. 統計処理：SPSS統計パッケージ、バージョン11を用いて処理した。

結果と考察

1. 縦断的資料による経年的変化および男女の比較

本研究は、最終的に沖縄県児童・生徒を対象とした、小学校高学年(5・6年生)のメンタルヘルス尺度を作成することであった。調査Ⅰでは小学校5年生を対象に調査を行い、因子分析を通して、5因子23項目からなる尺度を作成した。調査Ⅱでは、同一標本の縦断的資料に基づいて、経年的変化を見ることである。変化の対象として、メンタルヘルスに加えて体格、体力もとり上げている。

ルヘルスに加えて体格、体力もとり上げている。

表1～2は、体格、体力、メンタルヘルス得点の5年生～6年生の変化をみたものである。

体格と体力は、第2次成長期を反映して、男女とも、いずれも有意な発達を示している。特に、体格においては、女子は男子を凌駕しており、第2次成長期の発達速度の違いを示している。体力は、標準化された得点で示しているので男女間に差は見られない。一方メンタルヘルス得点の経年的変化は、女子の得点が2.6点有意に上昇したのに対して、男子はほとんど変化が見られていない。結果は5年、6年いずれも女子の方が高く、6年は5年よりもさらに高くなり、男女間の差が大きくなっている。メンタルヘルス得点の男女間に有意な差が見られたことから、さらに詳細に検討するために、因子別・学年別に男女の比較を行ったのが表3である。その結果は、衝動因子の5年次を除いて、他の4因子とも女子が有意に大きいことがわかる。その傾向を学年別に見た場合、5年次よりも6年次の方によりはっきりと男女差を認めることができ、それはt値の大きさにも反映されている。

以上、縦断的資料による経年的変化の結果は、一般的に言われるように、身長、体重の体格から見た身体発達のみならず、メンタルヘルスから見

表1. 体格、体力、メンタルヘルス得点の5年生～6年生の経年的変化 (男子)

種目	身長		体重		体力得点		メンタル得点	
	5年生	6年生	5年生	6年生	5年生	6年生	5年生	6年生
平均値	136.90	142.90	33.68	37.30	53.31	56.57	49.37	49.62
標準偏差	6.18	7.18	7.72	8.50	8.30	9.43	15.43	14.87
差判定	6.00 cm**		3.62 kg**		3.26 得点**		0.26 得点	

**p < 0.01

表2. 体格、体力、メンタルヘルス得点の5年生～6年生の経年的変化 (女子)

種目	身長		体重		体力得点		メンタル得点	
	5年生	6年生	5年生	6年生	5年生	6年生	5年生	6年生
平均値	139.96	146.31	35.02	39.80	53.60	56.91	54.53	56.63
標準偏差	7.04	6.84	7.43	8.25	7.86	7.91	14.05	14.77
差判定	6.35 cm**		4.78 kg**		2.99 得点**		2.10 得点	

**p < 0.01

表3. 各因子を学年別にみた男女の比較

因子	学年	5年次			6年次		
	性・判定	平均	SD	N	平均	SD	N
身体症状	男子	10.33	4.23	218	10.4	4.45	213
	女子	11.41	4.37	208	11.79	4.44	200
	判定	t = 2.59 df = 424 p < 0.01			t = 3.32 df = 411 p < 0.01		
対人不安	男子	11.75	4.83	218	12.02	4.45	213
	女子	12.88	4.55	208	13.47	4.71	200
	判定	t = 2.49 df = 424 p < 0.05			t = 3.18 df = 411 p < 0.01		
衝動	男子	11.13	4.25	218	11.14	3.96	213
	女子	11.68	4.35	208	12.05	4.37	200
	判定	t = 1.32 df = 424 none			t = 2.21 df = 411 p < 0.05		
抑うつ	男子	9.76	4.19	218	9.70	4.29	213
	女子	11.33	3.88	208	11.79	4.00	200
	判定	t = 4.01 df = 424 p < 0.01			t = 5.10 df = 411 p < 0.01		
非効力	男子	6.40	3.08	218	6.30	2.83	213
	女子	7.18	2.89	208	7.53	2.79	200
	判定	t = 2.67 df = 424 p < 0.01			t = 4.46 df = 411 p < 0.01		
メンタル得点	男子	49.37	15.45	218	49.62	14.87	213
	女子	54.53	14.05	208	56.63	14.77	200
	判定	t = 3.60 df = 423 p < 0.01			t = 4.79 df = 411 p < 0.01		

た心理的变化においても、男女間に異なる結果を見ることができた。このことは、第2次成長期においては、身体発達のみならず心理的变化にも、男子に比較して発達速度の大きい女子の変化は、注目する必要があることを示唆しているものと思われる。

2. 縦断的資料による相関分析 (信頼性の検討)

研究1 (小橋川 2002) では、クロンバックの α 係数を算出し、信頼性の検討を行った。その結果、5因子とも0.67以上の係数を示していた。今回は、尺度の安定性を見るために縦断的データについて相関分析を試みた。一般に尺度の安定性を見る場合、2~4週間程度の期間をおいて再テストが行

なわれるが、今回は学年進行に伴って調査がなされた関係で、再テストの期間が1年間という長期になっている。

その結果が表4に示されている。体格、体力も同時に示してあるのは、他の尺度と比較する意味である。体格(身長、体重)は、0.9以上という、非常に高い相関係数を示している。また、体力得点も、係数が0.7以上を示し統計的に有意であり安定性は確認することができる。それに対して、心理的要因であるメンタルヘルス得点と学校生活得点は、統計的に有意であるが、0.5という低い値を示す結果となった。このことは、体格的要因は環境的、社会的要因によって変化は少ないものと思われるが、それに対して心理的要因は、社会的要

表4. 体格、体力、メンタル得点の5年次~6年次の相関係数

年次	身長	体重	体力得点	メンタル得点	学校生活
5年次~6年次	0.954 **	0.965 **	0.739 **	0.532 **	0.500 **

** p < 0.01

因の影響をうけることもあれば、個人の感情の変化によっても影響を受けるものと思われ、低い結果になったと考える。いずれにしろ、1年間という長期期間を考えると、十分に安定性を確認することができたものとする。

3. 縦断的資料による妥当性の検討

作成された5因子23項目からなるメンタルヘルス尺度の有効性を検討するために、園田の研究と同様に、学校生活尺度（引きこもり、テスト不安、反発）との相関分析を通して検討することとした。園田らによって作成された学校生活尺度の中から、今回利用した尺度項目は、全てネガティブな側面を測定するものであり、因子分析を通して確認されている。

表5 メンタルヘルスと学校との相関（5年次）

因子	反発	引きこもり	テスト不安	学校生活得点
身体症状	0.260**	0.402**	0.455**	0.474**
対人不安	0.219**	0.347**	0.513**	0.464**
衝動	0.479**	0.283**	0.356**	0.503**
抑うつ	0.252**	0.277**	0.514**	0.465**
非効力感	0.252**	0.277**	0.514**	0.442**
メンタル得点	0.401**	0.439**	0.630**	0.643**

** p < 0.01

表6 メンタルヘルスと学校との相関（6年次）

因子	反発	引きこもり	テスト不安	学校生活得点
身体症状	0.247**	0.352**	0.469**	0.471**
対人不安	0.147**	0.297**	0.533**	0.437**
衝動	0.487**	0.312**	0.375**	0.543**
抑うつ	0.092	0.150**	0.458**	0.331**
非効力感	0.225**	0.268**	0.513**	0.462
メンタル得点	0.322**	0.377**	0.636**	0.608**

** p < 0.01

表5～6に、学年別に学校生活との相関係数が示している。特徴的結果は、5年次、6年次とも、5因子が学校生活のテスト不安と最も高い係数を示していることであり、学校生活の中で、テスト

が心理的に大きな比重を示していることが伺える。また、いずれの因子も、学校生活得点と中程度の相関係数（0.4）を、メンタルヘルス得点との間には0.6以上の相関係数を示していた。このことは、一般的メンタルヘルスに学校生活が少なからず関係していることを示すものであり、子ども達にとって、学校生活の重要性が伺える。まとめるに相関分析の結果は、学校生活尺度に限定して例えば、今回作成したメンタルヘルス尺度が有効な尺度であることを立証することができたといえよう。

4. メンタルヘルス尺度の基準得点の設定

本尺度を用いて精神的に課題を持つと予想される上位群の被験者をどこで設定するかについて、研究目的で述べたように、統計学的な基準を設定し、カットオフ得点を設けることとした。

すなわち教育学の領域における棄却領域は、95%を基準としているのが一般的である。そして、両側検定の場合は両サイドに2.5%を、片側検定の場合はどちらか一方に5%の有意水準を用いて判定がなされる。本研究においては、メンタルヘルス得点の高い方の一方側を設定すればよいので、片側の5%をカットオフラインとして設定することとした。そのために活用するデータは、表1、表2に見られるように、性差が見られたことから性別に基準値の設定が必要で、また、男子は学年別に分ける必要が無く、女子は学年別に基準値を設定する必要がある。また、研究1の1104名の度数分布曲線を描いたところ、ほぼ正規曲線を示したことから、基準値設定に当たってzスコアを用いることとした。

表7 性別・学年・因子別基準得点（上位5%）

因子	男子		女子	
	5年生	6年生	5年生	6年生
身体症状	18.0	18.0	19.0	19.0
対人不安	19.0	19.0	20.0	21.0
衝動	18.0	18.0	19.0	19.0
抑うつ	17.0	17.0	18.0	18.0
非効力感	11.0	11.0	12.0	12.0
メンタル得点	74.0	74.0	78.0	81.0

以上の前提条件のもとに、学年別、性別の得点を、 z スコア (標準得点) の算出方法 ($z = (\text{得点} - \text{平均値}) / \text{標準偏差}$) を用いて計算した。ここで z の値は、片側で得点の高い方の5%を仮定すればよいことから、 $z = 1.65$ とした。その結果は以下の通りであった。

男子：5年次=74.87、6年次=74.15、女子：5年次=77.71、6年次=81.00

ここでの基準値は、あくまでも目安として設定するものであるため、大まかな概数を設けることとした。従って、男子は学年共通に74得点を、女子の5年次78点、6年次81得点を基準値と設定したい。

尚、因子別、学年別の基準値は、表7に示した。

5. 沖縄県小学生高学年用メンタルヘルス測定質問紙の作成 (まとめ)

本研究の最終的目的地は、沖縄県の小学校5・6年生を対象とした、メンタルヘルスを測定するための尺度を作成することにあった。研究1、研究2を通して得られた結果、次のような3つの部分からなる質問紙を作成することができる。

1) メンタルヘルス尺度

①身体症状、②対人不安、③衝動、④抑うつ、⑤非効力の5因子からなる23項目を抽出した。基準値は、得点の上位5%により設定した。

2) 学校生活関連尺度

①反発、②引きこもり、③テスト不安の3因子からなる14項目。

3) 生活関連尺度

①健康要因、②友人(仲間)要因、③睡眠関連要因の3要因からなる13項目。

以上を骨子とした質問紙を作成した(資料参照)。

本研究は科研費基盤研究(C) 課題番号14580047による。

引用文献

堀野緑・森 和代(1991) 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の変因教育心理学研究39 308-315.

小橋川久光・宮城正也・兼城賢作(2001) 沖縄県の小学生におけるメンタルヘルスと生活関連要因との関係 琉球大学教育学部 第58集 69-76.

小橋川久光・小林稔・高倉実・宮城正也・砂川武彦(2002) 沖縄県小学生用メンタルヘルス尺度の検討 琉球大学教育学部紀要 第61集 17-24.

宮城正也・小橋川久光・兼城賢作(2001) 沖縄県児童における精神的健康に関する研究 沖縄県立看護大学紀要第2号 29-35

大森 勲(2000) 学校における心の健康に関する指導の進め方 スポーツと健康 31-9 23-29.

岡安隆弘・島田洋徳・坂野雄二(1992) 中学生用ストレス反応尺度の作成と試み 早稲田大学人間科学研究 5-1 23-29.

園田菜摘・櫻井聖子・大島知佐子・無藤隆・山梨八重子・高木悦子(2000) 小・中学生のメンタルヘルス一尺度作成と学校生活との関係お茶の水大学発達臨床心理学紀要 第2号 15-24.

山崎晃資(2000) 児童生徒の心の問題の現状と課題 スポーツと健康 32-7 25-32.

渡辺美枝子(2000) 心の健康問題の現状と心の健康に関する指導の意義 スポーツと健康 31-9 32-35.

『付録』 沖縄県小学生高学年用メンタルヘルス尺度と関連尺度

質問項目

1. メンタルヘルス尺度

評価尺度(1. まったく当てはまらない、2. あまり当てはまらない、3. どちらでもない、4. まあまあ当てはまる、5. とても当てはまる)

1. 何時も肩がこっている。
2. 人が大勢いると、うまく会話の中に入っていないことがある。
3. ちょっとしたことでも頭にきて暴力をふるってしまうことがある。
4. 自分が悪かったと悩むことがある。
5. 自分はたいした才能もないから、えらくならないと思う。

6. いつも頭が重い。
7. たくさんの人がいると、どう行動してよいかわからず、とまどうことがある。
8. 周りの人に対して気に入らないと思うことがある。
9. 過去の失敗をいつまでも引きずることが多い。
10. 自分は役に立たない人間だと思う。
11. 胸がドキドキする。
12. クラスでの話し合いのとき、まわりからどう思われたか気になって発言するのがむづかしい。
- 13.気に入らないことがあると、あたりちらすようなことがある。
14. いろいろなことについて、あれこれと心配する。
15. 自分の将来は暗いように思う。
16. 呼吸がくるしくなることがある。
17. 新しい友達を作るのが苦手だ。
18. いやなことをたのまれたら、いいかげんなやり方をすることが多い。
19. ひどくがっかりすることがある。
20. 眠れない。
21. 言いたいことをうまく伝えられない。
22. 自分が正しいと思ったら、人前でも相手をこっげきすることがある。
23. 腹痛（げり、べんぴなど）をおこす。

2. 学校生活関連尺度

評価尺度（メンタルヘルス尺度と同じく5段階評定）

1. 学校の物は、自分の物より、らんぼうにあつかうことが多い。
2. 人と話すのはすきでない。
3. 十分にテストの勉強をしても、いつも本番（ほんばん）で落ち着いていられない。
4. 授業中、勝手（かって）に席をはなれることが多い。
5. 友人に会うのがめんどうくさい。
6. 友だちから無視（むし）されたり、いじめられていると感ずることがある。
7. 先生の言葉に反発（はんぱつ）を感じては、口ごたえをすることがある。

8. 休み時間、何をしたらよいのかわからないことがある。
9. 学校の勉強についていけないと不安に感ずることがある。
10. 特別な理由もなく、授業におくれることがある。
11. 朝、気分が悪く学校を休みたくなる。
12. 授業中でも、おもしろくなければ別のことをしていてもかまわないと思う。
13. テスト中あがってしまって、知っていることでも思い出せないことがある。
14. 授業中、先生に注意（ちゅうい）されても友だちとおしゃべりを続けることがある。

3. 日常生活関連尺度

評定尺度（それぞれ、項目毎に以下の通りである。）

1. あなたは、自分の健康状態をどうおもいますか。
 - 1) とても健康
 - 2) まあまあ健康
 - 3) あまり健康ではない
2. 1日の睡眠時間は平均するとおおよそどれくらいですか。
 - 1) 6時間未満
 - 2) 6以上7時間未満
 - 3) 7以上～8時間未満
 - 4) 8以上～9時間未満
 - 5) 9時間以上
3. 今学期、学校でどれくらいいいじめられましたか？（けんかなどはいじめではない）
 - 1) いじめられなかった
 - 2) 1回か2回いじめられた
 - 3) ときどき
 - 4) 週に1回くらい
 - 5) 週に数回
4. 1年間に、病気でどれくらい休みましたか。
 - 1) ほとんどやすまない
 - 2) 1～2日
 - 3) 3～6日
 - 4) 7日～9日
 - 5) 10日以上
5. 「仲間はずれ」ということについて、どれくらい感ずりますか。
 - 1) いつも感ずる
 - 2) しばしば感ずる
 - 3) 時々感ずる
 - 4) たまに感ずる
 - 5) まったく感ずらない
6. 平均すると1ヶ月間に、友だちとどれくらいもめますか。
 - 1) ほとんどもめない
 - 2) 1回
 - 3) 2, 3回
 - 4) 4, 5回
 - 5) 6回以上

7. 新しい友だちをつくることは、かんたんですか？それともむづかしいですか？
1) とてもかんたん 2) かんたん
3) むづかしい 4) とてもむづかしい
8. 一週間に習い事には、どれくらい通っていますか。
1) 行っていない 2) 1回 3) 2回
4) 3回 5) 4回以上
9. 毎晩、寝る時間は何時ごろですか？(平日)
1) 9時前 2) 9時～10時前
3) 10時～11時前 4) 11時～12時前
5) 12時以降
10. 帰宅後(休日以外)、運動をしたり、外遊びをする時間はおよそどれくらいですか。
1) ほとんどしない 2) 30分 3) 1時間
4) 1時間30分 5) 2時間以上
11. 今学期、学校でどれくらい他の子どもをいじめましたか。
1) いじめなかった 2) 1, 2回
3) ときどき 4) 週1回くらい
5) 週に数回
12. 最近、1年間の学校でのあなたの成績はどうだったですか。
1) 非常に優秀 2) 優秀 3) 普通
4) 悪い 5) 非常に悪い
13. 1日に家族(兄弟以外)の人とどれくらい会話をしますか。
1) ほとんどしない 2) 30分 3) 1時間
4) 1時間30分 5) 2時間以上